

2006年6月14日
グループ研究発表

建築 世界旅行

豊島典明、池戸漠、小川慶太

建築 世界旅行 —建築と国家：イデオロギーと表象—

0. はじめに

大戦間の政治的緊張の中、各国の威信の表現は建築に託された。しかし、機能性や抽象美を特徴とする近代主義はそれを満足させることはできなかった。当時の列強国の建築は歴史主義の道、すなわち「新しき伝統」の道を歩むのである。その成り立ちは国により異なる。果たして建築はイデオロギーの表象としての役目を果たす事ができたのであろうか。

1. 新しき伝統

近代運動の主流に対して明らかに保守的な傾向（ヒッチコック、1929）

※近代主義のあらゆる形態を抽象へと還元する傾向

→国家のイデオロギーの表象において図像学的に無力

◆起源

「近代化された」歴史主義様式、

折衷、装飾過多、愁いを帯びた象徴主義

◆新しき伝統の出現

ネオ・バロック風の大衆的スタイルと超然と絶縁

→精神的に古代ローマの重厚、明晰さに回帰

新しき伝統とされる作品

ウールワース・ビル（キャス・ギルバート）

シュトゥットガルト駅ビル（ボナッツ）

フィンランド国会議事堂（シンレ）

→国家のイデオロギーの表象に利用

近代主義との明白な対立

◇「ニューデリー計画」（1912）

・アングロ・インディアン様式（イギリス側のイデオロギーの具体化）

・建築が再び国家イデオロギーの表象となる先駆け的事例

2. ソヴィエト連邦

◆近代運動と新しき伝統の相克

・産業化された社会主義国家の隠喩

◇ソヴィエト・パレスの設計協議

近代主義——機能主義の過度な礼賛（ル・コルビュジェ）

※コルビュジェの設計経歴でもっとも構成主義的

新しき伝統——モニュメンタリーの尊重（イオフアン）

※社会主義的リアリズム様式

図像学：宗教的図像の個別的表現を、教義上の規定や意味から解釈する研究。転じて、広く芸術作品の象徴・寓意・隠喩などの意味を探る研究。イコノグラフィー。（広辞苑）

古典主義：17～8世紀におけるヨーロッパ芸術の支配的思潮。古代のギリシャ、ローマの芸術を規範とし理念の完全明晰な表現、調和的な形式、理想的な人間像を重視する。

◆構成主義に対する悪意

ヴォプラ——プロレタリアだけがプロレタリア文化を創造する狙い手
教条的かつ弁駁不可能な挑戦状

共産党——一般大衆は近代建築の抽象美によく反応することはできない
→構成主義の限界を指摘

◇ソヴィエト・パレス計画案 (イオファン)・・・機械主義
(コルビュジェ)・・・モニュメンタリー
◇レーニン国立図書館

3. ファシズム・イタリア

◆未来主義の衰退

未来主義「社会再建という革命的関心」

「戦争礼賛、機械崇拜」 ファシズムの修辞法に効果的に利用される

→戦争の惨事とともに、懐疑の目で見られるように

◆古典主義の採用

◇未来派の機会礼賛に対するアンチテーゼ

地中海地域の古典主義様式

◇ファシズム権力による採用

未来主義は国家主義イデオロギーを表象できない

→古典主義を単純化して採用

◇デ・キリコ

◇EUR

4. 第三帝国

◆ナチスの狙い

・大衆に心理的安定を与える建築

・産業戦争、政情不安などにより失われた伝統的な社会への償い

※第一次世界大戦後のベルサイユ条約により、社会の不安定さと危機に乗じて政権を掌握したナチスは、それゆえ内部矛盾を内に抱え込んでいた

ベルサイユ条約：ヴァイマル共和国時代には領土の削減、莫大な賠償金、軍備の制限、占領軍の駐留等でドイツ人の誇りを傷つけることとなった

◆国家社会主義(Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei)

◇ベルサイユ条約によって失った誇りの回復

社会主義を標榜しながらも、「国家」秩序を選択

→近代主義の合理的流れが断たれる

◇反都市的、民族中心的イデオロギーの展開

・郷土様式、土着的な集合住宅(リヒャルト・ヴァルター・ダレの諸説が理論的根拠)

・産業による都市化現象や小農階級の没落の非難

農業中心の定住方式こそ愛国思想の砦(ダレ)

→近代主義に対する嫌悪と、古典主義への回帰

◆厳格な古典主義

◇千年王国²のイデオロギーの表象

建築家：パウル・ルートヴィヒ・トロースト(ミュンヘン美化計画)

アルベルト・シュペーア(総統官邸、ニュンベルク・スタジアム)

様式：無装飾あるいは溝彫りのついた矩形の柱(啓蒙主義運動へのノスタルジー)

→映像と共にナチ・イデオロギー教化に奉仕

※啓蒙主義運動のイメージも信念もなくしたドイツでの「新古典主義」は、

結局背景画に成り下がるしかなかった

◆厳格な古典主義

・千年王国²のイデオロギーの表象

→古典主義の遺産の利用

ベルリン総統官邸

映像と共にナチ・イデオロギー強化に奉仕

しかし結局、ドイツでの「新古典主義」は背景画に成り下がるしかなかった

5. アメリカ合衆国

◆美学的な起源

◇ゴシック様式、古典主義への偏愛

【例】ウールワース・ビル

ボストン公共図書館

※保守的な連邦政府は、これらを後押し

◇アール・デコ様式

装飾の復権

【例】クライスラー・ビル

→画一的な近代主義に対する批判 ※ヨーロッパ諸国と比較し、美学的な要因

◆進歩に対する熱狂と繁栄の誇示への欲求

- ・民主主義と資本主義の勝利
- ・第一次世界大戦での成功

◇表現方法

衰残のヨーロッパ様式ではない、より自由かつ、折衷的に

ロック・フェラー・センター

◆時代背景

大恐慌の時代 → 危機の真最中にイリュージョンと気晴らしの都市

◆アール・デコと国際様式の同居

◆記念性

プロメテウス像、アトラス像

6. 新しき伝統の終焉

◆新しき伝統に対する嫌悪

◇権威の失墜

- ・国際連盟の権威の失墜

◇メディアの台頭

- ・メディアがイデオロギーの表象に利用される

◇戦争への集中投資

- ・技術が戦争に利用され、建築に手がまわらなくなる

◆機能主義の台頭

7. 反動としての記念性の迫及

※近代運動の勝利の影で、記念性を求める反動現象が起こる

◆モニュメントとは（セルト、レジエ）

- ・人間の理想、目標、行為の象徴→次の世代の遺産
- ・民衆の感情と思想を表現
- ・機能の充足以上を求める民衆

8. 考察

大戦間期、列強国は政治的、経済的な緊張感に包まれる。そんな不安定さの中、国家はその安定性、威信の表象を建築に託すのである。しかし当時、近代主義の主流をなしていた抽象的かつ機能的な建築の傾向は、その役目においては力不足であった。国家のイデオロギーを表象する記念碑としての役割を負わされた建築は、長い伝統を持つ古典主義的な

表現（「新しき伝統」）へと向かった。

果たしてそれは、国家のイデオロギーを表象し、安定をもたらす事ができたのであろうか。「新しき伝統」は、繁栄する国家、帰属意識を持ち団結した民衆という一時的な幻想をもたらした。しかし、それは懐疑や失望にかわっていった。国家の意図と民衆の目に映ったものには乖離が存在していたのである。ゆえに、私たちは「新しき伝統」も民衆を動かす絶大な力は持ち得なかったし、ひいては建築そのものが、民衆を動かす絶大な力を持つことは難しいのではないかと考える。

参考文献

ケネス・フランプトン『現代建築史』青土社、2003年

大川三雄、川向正人、初田亨、吉田鋼市『近代建築の系譜』彰国社、1997年

村松貞次郎、山口廣、山本学治『近代建築史概説』彰国社、1998年

ニコラウス・ペヴスナー『ヨーロッパ建築序説』彰国社、1989年

西田正嗣『ヨーロッパ建築史』昭和堂、1998年

八束はじめ、小山明『未完の帝国 ナチスドイツの建築と都市』1991年